福祉健康科学研究（18）069-076，2023

原著論文

クロッキー指導に関する一考察

佐伯　岳春

福山平成大学　福祉健康学部
（こども学科）

E-mail : sae-take@heisei-u.ac.jp

【要旨】

クロッキーとは、主に人物や動物など動きのあるものを素早く簡潔に描写することである。短時間での作品制作となることから、集中力を持続しにくい子どもが絵を描く活動にも導入しやすいと考えられることと、基礎的な描画力の育成のためクロッキー指導の導入が必要と考えられた。方法は、保育者・教育者養成課程の学生へクロッキー指導と幼稚園教員、小学校教員へのクロッキー指導を行った。研究方法として受講者自身が描いた絵に自己評価点を付けさせた。また、指導に対する感想を自由記述させ考察した。

結果は、学生へのクロッキー指導では、自己評価の平均点が最初の基準より上昇し、教員へのクロッキー指導では、最初の基準点と自己評価の平均点に差がなかった。自由記述から考えられることとしてクロッキーは、短時間で集中して絵を描くことから、絵を苦手としている受講生保育者・教育者養成課程の授業などで取り組むことも有効ではないかと考えられる。

KEY WORDS：クロッキー、保育者・小学校教員養成課程の学生、幼稚園・小学校教員

1．問題の所在

クロッキーとは、主に人物や動物など動きのあるものを素早く簡潔に描写することである。クロッキーもスケッチの一種といえるが、クロッキーは、一般的に、最長でも10分程度までの短時間で描くこと、または、描かれたものを指す。このように、クロッキーは、短時間での作品制作となることから、集中力を持続しにくい子どもが絵を描く活動にも導入しやすいと考えられる。

また、幼児期に子どもの描画活動においてクロッキーをすることは、描かれる絵の正確さよりも、絵を描くときの基本となる目と手が連動した動きの痕跡として描かれた線の美しさや勢いなどに、子どもの発達の状態を確認できる。人物を描くことに関しては、５歳ごろから、人物の目や鼻、指など体の細かな部分にも目を向け描くようになる。子どもは、写真や図鑑などを見るのではなく、友達をモデルとして実物を見ながら描くことができる。実物を描くことは、図鑑や写真等、そのものを一方向から見て描くのではなく、様々な方向や距離、対象を身近に感じて、色や感触、匂い等、視覚だけにとどまらない五感を通して感じたことを表現できる描画となる。

クロッキーが幼児期に導入されている例として、造形的な教育を中心に幼児教育を展開しているレッジョ・エミリア・アプローチのプロジェクトなどがあげられる[1)]。プロジェクトとは、ある概念を言葉で聞くだけでなく、五感で感じ、造形的な表現を行うことで、子どもが、その概念を認識していくものである。

クロッキーが導入されているのは、「群衆」というプロジェクトである。「群衆」プロジェクトでは、子どもが「群衆」の絵をイメージして描くことで、集まっている人が一人ひとり異なるということを認識する。認識のきっかけとなるのは、「群衆」として、同じ人を何人も描いた絵に対して「群衆」は同じ人でできていないという子ども同士の批判からである。続いて、人が多く集まっている群衆の写真をプロジェクターで投影し、群衆の中の一人の心情を推察するという遊びなど、「群衆」という概念を、方法を変えて遊びを繰り返し、最終的には、粘土や紙人形で一つ一つ異なる人を沢山作り、１か所に集めることで、子どもが「群衆」を表現する。

そのプロジェクトで、クロッキーが導入されているのは、「群衆」を表すために、まず一人の人間を観察し、絵で表すにはどのようにするかという場面である。クロッキーの場合、短時間での描写のため、子どもがモデルとなることが可能である。その為、子どもがモデルを順番に代わって、友達同士を観察して描いている。たくさんの友達を描くことで、人間が一人ひとり、外見や表情などが違うという理解の一助となっている。また、正面から見たときは手や足が両方見えるが、側面から見ると片方しか見えないなど、見る方向によって、人がどのように見えるかを認識していくことにつながっている。

レッジョ・エミリア・アプローチにクロッキーが導入されている場面から、幼児期の描画活動にクロッキーを導入することも可能ではないかと考えられる。

では、保育者・教育者養成課程の学生は、クロッキーを経験したことがあるのだろうか。金子（2014）は、教育学部で図画工作科教育法などを担当しているが、「現在の大学生に小・中学校時代のクロッキー経験を聞いても無いか、あったとしても記憶に残るような指導はなかったという回答が大部分である[2)]」と述べている。大石（2019）は教育大学の美術教育分野絵画ゼミを担当する中で「授業の最初に高校時代のクロッキー、あるいは人体デッサンの実践経験について質問すると、ほとんどの学生が未経験である[3)]。」と述べ、高校の美術教育の時間数や設備不足、モデルの確保が困難でクロッキーが行われていないことが推察できる。

本研究の対象となる学生に対しても、クロッキーを知っているかと質問したところ、クロッキーという言葉を知らないものがほとんどであった。学生だけでなく、幼稚園教員と小学校教員を対象とした教員免許更新講習時、受講者にクロッキーという言葉を知っているかについて尋ねたところ、全員が知らないという回答であった。これは、小・中・高での美術教育や保育者・教育者養成課程において、クロッキーがあまり行われていないということを示唆している。

では、小・中・高や保育者・教育者養成課程の美術教育においてクロッキー指導の必要性はないのだろうか。桶田（2009）は、「人物は静物や風景と違い、長時間同じ状態で留まっているわけにはいかない。おのずと限られた時間内で制作を終了しなければならない。そのような状況下での最適な描画方法のひとつとしてクロッキーが挙げられる。」とし、クロッキーは、絵画における基礎的な能力を身につけ、「短時間描写にも適応しているため、数多くのポーズを描くことができ、人体の立体構造の把握に最適な描画方法である[4)]」と述べている。

金子（2014）は、「美術は芸術の一つとして、像（意味）と感情（価値）という二つの要素から成る。クロッキーも例外ではない。すなわち、最終目標は対象の客観

的像でなく、感情の喚起であると考える。」と述べ、クロッキーは、短時間での人体の客観的な表現に加え、感情を喚起し表現できるのではないかと主張している。

また、大石（2019）は、「正確に形態を把握し、丁寧に描写する方向に重点を置く内容から、自由でおおらかなデッサン表現を獲得するための手段として、短い時間で結果の得られる人体クロッキーを実践した[5]」ことを報告している。こうした主張からクロッキーは、学生に対して、基礎的な描画力の育成につながり、短時間で、対象を描写する力だけでなく、自由でおおらかな感情を表現できる手段として指導の必要性があると考えられる。

クロッキー指導の必要性はあると考えられるが、美術教育で指導があまり行われていない可能性がある。それによる弊害は、どんなものが考えられるだろう。大石（2019）は、クロッキー指導の現状から、「指導教員の人体デッサン等への経験不足が原因となり、十分な教育がなされていないのではないかと推察される。そのため、学生の人物画製作に対する苦手意識が強く、人体をモチーフとしてとして選択しない傾向がみられる。このことにより人物画で得られる描画力、構造理解、作品鑑賞力が損なわれていることが考えられる。また苦手意識を持たない学生においても、デッサンにおける形態や構造の把握ができていない事例が見られる[6]。」と指摘している。

保育者・教育者養成課程の学生の場合、保育士試験では、保育の一場面を、色鉛筆を使って絵画で表現するという課題があり[7]、小学校教員採用試験でも手をデッサンする実技課題などが想定されることから[8]、人物などを鉛筆で短時間に描写できる力が求められることもあると考えられ、クロッキー指導が必要ではないかと考えられる。

では、クロッキー指導は必要と考えられるが、どのような点に意識して指導すべきだろうか。金子（2014）は、「クロッキーがうまくいかないのは、意欲や能力の問題ではなく、認識と行動様式の問題、つまり特定方向への思い込みや惰性化した動作システムのためと考える。ほとんどの人は、主観的には、うまくいったと思えるクロッキーが描けるはずである。そうでなければ、普通教育の意義はない。[9]」として、大学の教育学部において、図画工作科教育法の授業に取り入れている。本研究においては、保育者・教育者養成課程の学生と、幼稚園教員、小学校教員に対して、クロッキー指導を行い、下線をいれた金子の主張が認められるかどうかを意識してクロッキー指導について考察する。

また、大石（2019）は、人物画制作に対して消極的な学生が、積極的に制作できる描画教育を検討し、「クロッキーやドローイングを重ねてイメージを多方向から捉えなおしてから制作に入るよう進めたところ、作品に柔軟性が生まれ良い結果につながった[10]」ことを報告している。こうした実践研究では、学生は、形態の正確さに主眼をおいて、鉛筆などによる線そのものの構成の美しさなどへ制作時の意識が至ってない点も示しており、学生には、そのものらしく正確に描くだけでなく、描く線の美しさや勢いなども認識させることが必要だと考えられる。

スケッチやデッサンなど、人物を見て描くという描画に対して、大石の研究同様、本研究の対象となる学生にも人物を描くことに消極的な学生が散見される。その為、クロッキーを導入し、何度も短時間に対象を集中してみることで、人物のイメージがとらえやすく、描きやすくなり、少しでも積極的に人物画の制作に取り組めるのではないかと考えられる。

以上の先行研究や学生への質問などから、クロッキー指導の機会が減少している現状が示唆されるが、クロッキー指導は必要だと考えられる。

幼児期の描画活動においては、子どもが人間一人ひとり、異なることへ認識を深めるためにもクロッキーを導入できる可能性があり、保育者・教育者教員養成課程の学生と幼稚園・小学校教員を対象とした教員免許更新講習の受講者クロッキーを経験することで、遊びや教材へ使うことができると考えられることから、クロッキー指導を導入した。

2．研究目的

保育者・教育者教員養成課程の学生と幼稚園・小学校教員を対象とした教員免許更新講習の受講者が、短い時間で集中して絵を描くクロッキーをすることで、クロッキーについて理解を深めると共に、人体の部位の形態やバランスに気づき、抽出形態の正確さだけでなく、絵に運動感やリズム、勢いなどを意識して美しく表現できるようになることを目的とした。

また、クロッキー指導を受けた者が自分の描いた絵に対する自己評価を行い、主観的にうまくいったと思えるクロッキーが描けているかどうかについて調査することとした。

３．対象及び研究方法

（1）保育者・教育者養成課程の学生へのクロッキー指導、以下 “学生へのクロッキー指導”

１）対象

ＦＨ大学　ＦＫ学部　Ｋ学科　保育者・教員養成課程の学生　30名

２）クロッキー指導した授業

「幼児の描画理解とその指導」

この授業の内容は、子どもの絵の発達過程や年齢に合わせた描画指導である。その為、クロッキーという短時間で絵を描く方法を知ることで、受講生が保育者、教育者になった場合、絵を描く遊びや授業などへ導入できることを視野に入れ、この授業を選択した。

３）研究方法

2020年　後期15回の授業のうち９回目までの授業の冒頭10分間を人物のクロッキーの時間として行った。モデルは学生が順番に交代して実施した。

毎回クロッキーが終わると、金子（2014）の研究法を参考にし、第１回の無指示のクロッキーを100点として、２回目以降を0～200点の間で自己評価し評価理由とともに提出させた[10)]。

このクロッキー指導も金子の研究法をもとにし、１回目は、自分が思うままに絵を描かせた。１回目の絵を振り返り、自分がどこに注意して絵を描いたか振り返った後、２回目のクロッキーの前に、学生の評価観点と教員の評価観点が異なることを示し、１回目を100点として自己評価を行った。第４回では、人物の体の部位の割合やバランスなどを提示し、人物の全体像を正確さだけでなく、線の勢いやバランス、形態の持っている美しさなどにも注目し描くことを指導した。

30名の学生は、人物を描くクロッキーとして、正確さや、鉛筆の使い方など、個々にかなり技量の違いが見られた。その為、全体に対してクロッキーの描き方の指導を説明する機会を多くするより、提出されたクロッキーに対して30名それぞれに、評価と次の描画時に留意する点などのフィードバックを行った。

（2）幼稚園教員及び小学校教員によるクロッキー指導、以下 “教員へのクロッキー指導”

１）対象

幼稚園教員９名、小学校教員１名　10名

２）クロッキー指導した講習

「教員免許更新講習」

2021年８月10日　10：45～11：45

３）研究方法

クロッキーは全５回実施した。１回目は、10分間のクロッキーを行い、講習時間の都合で２回目から５回目は、５分間のクロッキーを実施した。モデルは、１回目を担当教員が行い、２回目から５回目までは、２人から３人の受講生が順番にモデルを交代して実施した。受講生は５回のクロッキーの中で１度は、モデルを体験するので、描くのは全部で４回になる。“教員へのクロッキー指導実践” においては、ねらいを「作品の制作過程において、人物クロッキーを行い、人体の部位の大きさやバランスに気づく。」として、到達目標を「鉛筆を使って思い切って、線描できるようになる。」と説明した。実践前に、体の部位の比率や大まかに頭、腕や足、胴体などのアタリをつけ描いていくよう描き方を紹介した。そして、絵を描くこと自体を長期間していない受講生も多く、短時間だが、のびのびと描くことを重視するよう説明した。

クロッキーを終えると、“学生へのクロッキー指導” と同様に第１回のクロッキーを100点として、２回目以降を０～200点の間で自己評価を実施した。教員免許更新講習では、１回ずつ、自分の絵を見てコメントするのではなく、５回のクロッキー終了後に自分が描いたすべての絵を見て、実践の振り返りを行った。

４．研究における倫理的配慮

保育者・教育者養成課程の学生及び教員免許更新講習の受講者に対して、実践を行う前に研究内容を説明し、作品及びコメント等を学会等で公開することを説明した。公開は個人が限定されることが無いことと、公開することが成績評価に影響がないことを十分に説明し、学生及び受講者全員の承諾を得た。

５．総合考察

（1）保育者・教育者養成課程の“学生へのクロッキー指導” の結果及び考察

毎週、継続的に授業の冒頭で10分間のクロッキーを実践した結果、学生の自己評価の平均点は、100点を基準にして、表１の結果となった。

表１　学生の自己評価の平均点

回	1	2	3	4	5	6	7	8	9
学生	100	96	102	106	105	111	99	106	114

実践の回数を重ね、前回よりも自己評価の平均点が低くなったのが、２回目、５回目、７回目となった。

２回目で平均点が下がっている理由としては、学生に対して、金子（2014）の研究結果を示し、形態の正確さだけでなく、鉛筆の線の勢いや美しさについても説明したことが大きいだろう。その為、当初学生が考えていた絵がうまく描けていると思う観点だけでなく、描かれている線の美しさや、全体を構成する美しさに各自が気づいたため、点が下がったのではないかと考えられる。

５回目に平均点が下がっているが、４回目が106点、５回目が105点と１点だけとなっている。モデルのポーズとして、立っている全身像の正面、背面、側面と描いていき、４回目は、椅子に座ったポーズを描かせた結果、座っているポーズは難しいというコメントが多かった。そのため、５回目は、像の正面をもう一度描かせた。立っている全身像の正面は２度目の描画となり、自分の描画で２度同じポーズを評価することになった。５回目は、評価する目が養成されてきており、点が少し下がったのではないかと思われる。

７回目に評価が下がっている理由としては、単純に授業の期間が空き、クロッキーの感覚が鈍ってしまったことが挙げられる。これまでは、１週間に１度のペースで10分間集中してクロッキーを行っていたが、７回目は、授業予定の関係で２週間、期間が空いた。クロッキーをしている全体の様子も、普段に比べると、集中力を欠き、凛とした雰囲気を感じることが無かった。ただ、この期間が空いたことで、自己評価の平均点が大きく下がったことは、継続的に絵を描くことが、学生の絵に対する自信にもつながっていたことを示していると思われる。実技分野で系統だった継続的な取り組みは、短期間でも、ある程度の効果が見込まれるのではないかと考えらる。

また、全体的な自己評価の平均点は、開始の100点に比べ、９回目は、114点となり、自分が描いた絵の評価が全体的に上がっていることが分かる。そのため、目的としていた、主観的にうまくいったと思えるクロッキーが描けているかどうかについては、多くの学生が、主観的だが上手くいったと判断していると考えられた。人体の部位の形態やバランスに気づき、抽出形態の正確さだけでなく、絵に運動感やリズム、勢いなどを意識して美しく表現できるようになることへの理解が深まっているのではないかと推察される。

今回のクロッキー指導をとおして、学生が絵を描く過程の課題と考えられる点は、クロッキーとして、10分間の短い時間に全体的に描いていくという描画方法への理解である。２回目のクロッキー実践前に、学生の評価観点と教員の評価観点が異なることを示した際に、合わせて完成したクロッキー作品を提示し、鉛筆の使い方やアタリの取り方、線の強弱なども含めて説明したが、それを10分間でどのように仕上げていくかについては口頭のみの説明となった。途中経過のクロッキーについては、画像などを見せていなかったので、理解が深まらなかったのではないかと思われた。こうした内容は、学生のコメントにも表れている。「足の部分のバランスが悪くなった。」「顔がでかすぎて足が入らなかったので、気をつけたいです。」「全体は描けたけど小さくなりすぎました。」など、実践を始めた当初は、画面の中にどのようにモチーフを配置するのかを考慮せずクロッキーを行ってしまっているコメントが多かった。

そうしたコメントには、全体的にアタリを取って描いていくことを重点的に指導したコメントを書き返却した。そうすることで、次第に、画面の中にバランスよく配置できる学生が多くなっていった。

また、上半身を先に重点的に描いてしまい、後半になって下半身を無理に画面に入れようとして、下半身が小さくなるなど、粗雑な仕上がりになった学生も多かった。そうした学生には、全体的なアタリを取ることに加え、下半身を先に描くように指導すると、全体的にバランスの良い絵となっていった。

以上の事例から、クロッキーをはじめとする造形的な知識や技量の上達は、学生個々の技量に合わせた指導が必要であることだと考察した。

（2）“教員へのクロッキー指導“ の結果及び考察

教員免許更新講習として、１時間に全部で４枚のクロッキーを描いたが、受講生の自己評価の平均点は、最初の100点を基準にして２回目が96.5点、３回目が97.5点、４回目が100点という表２の結果になった。

表２　教員の自己評価の平均点

回	1	2	3	4
教員	100	96.5	97.5	100

“教員へのクロッキー指導”では、“学生へのクロッキー指導”と同じように、２回目の平均点が下がる結果となった。“学生へのクロッキー指導”の場合、教員と学生の評価観点の違いを伝えたことから、再度、自分の絵を見直した時に自己評価が下がったと考えられたが、“教員へのクロッキー指導”では、２回目でなくクロッキーに入る前に、絵を指導する担当教員と受講者では、評価観点が違うことが多いと伝えていた。その為、“学生へのクロッキー指導”と異なる理由と考えられた。

クロッキー指導の異なる点として“教員へのクロッキー指導”では、１回目は、10分間のクロッキーを行い講習時間の都合で２回目から５回目は、５分間と時間が短くなっている。自己評価点の平均点が下がった理由としては、絵を描く時間が少なくなり、満足した絵が描けなかったと思われた。その後、描いた枚数が増えるごとに、自己評価の平均点もわずかに上がってきていることから、短い時間に絵を描くという描画活動に慣れてきて、次第に満足した絵が描けるようになってきたと考えられる。

（3）今後の課題

“学生へのクロッキー指導”終了後に、クロッキーを経験したことに対する感想を自由記述させた。「短い時間で何回かに分けてクロッキーしたので良かったです。理由は、毎週、先生がコメントしてくださったので、自分がどうしたいか分かったし、何を修正すれば良いのか分かって上達することができたと思うからです。」「90分間集中して何枚も描いてもあまり変わらないと思うので、何回かに分けて描いて良かったです。」など、短い時間で、何回か集中して絵を描くという実践が良かったという意見が多かった。また、毎週フィードバックのあることが、学生たちにとって学びが深くなったと考えられる。

“教員へのクロッキー指導”についても終了後にクロッキーを経験したことに対する感想を自由記述させた。実践前にクロッキーの描き方を説明したが、絵を描くことを長期間していない受講生も多かったが、「短い時間で何度も繰り返すことで上達することが分かったので良かったです。」「短い時間でポイントをつかんで描くことを学べて良かったです。集中する力もつくと思いました。」「回数を重ねることで体のバランスの描き方が早く描けるようになりました。」など、短時間に何度も集中して描くことが、対象を見て描くという力がつくのではと受講生が感じていることが分かった。

“学生へのクロッキー指導”及び“教員へのクロッキー指導”においては、苦手意識を持つ人に対して、絵を描く時間を短く設定することで、回数を重ねても苦手意識を気にせず集中して描くことができ、ある対象を見て描く力の向上につながると考えられた。その方法として、“学生へのクロッキー指導”のように、数か月にわたって短い時間に描くという活動を定期的に行うことが良いのか、“教員へのクロッキー指導”のようにある一定の時間に多く枚数を描くことが良いのか、実践方法や、その時間の割り振りなど、まだまだ検討すべき課題は山積していると考えられる。ただ２つの実践を行い感じたことは、絵を描くということに対して苦手だと感じている人も10分程度の短い時間という設定では、苦手意識を感じることよりも絵を描くということに集中すると考えられる。その為、描画表現において、あるものを対象とした描写の技量を身につけるためには、短時間で集中して描くクロッキー実践などを、授業の中に組み込むことが有効であると考えられた。今回のクロッキー実践では、描画の基礎的な技量の育成として検証したが、何かを作ることや絵を描くといった造形的な表現には、他にも多様な基礎的な技量の育成が必要である。そうした表現の基礎的な技量の育成として、短時間に集中して何か描く、何か作るといった活動を取り入れても効果があるのかなど、今後も検証を重ねたいと考えている。

引用・参考文献

１）レッジョ・チルドレン著　ワタリウム美術館編　子どもたちの100の言葉」p216㈱日東書院

２）金子一夫（2014）「クロッキー指導における指示の構成と評価観点－非美術選修学生に対する実践を通して－」『美術教育学（美術家教育学会誌）』第35号　pp255－267

３）大石朋生（2019）「描画教育における人体クロッキーの指導に関する実践研究－北海道教育大学美術分野の教材開発を通して－」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第69巻　第２号　pp.293－302

４）桶田洋明（2009）「人体クロッキーの指導法に関する一考察」『鹿児島大学教育学部研究紀要　教育科学編』第60巻　pp.29－37

５）大石（2019）同上
６）大石（2019）同上
７）〈付記〉
一般社団法人　全国保育士養成協議会
（hoyokyo.or.jp）
「保育士試験を受ける方へ　過去の試験問題」
令和３年１月10日取得
８）協同教育研究会　編集　教員採用試験「参考書」
（2020）p250　協同出版株式会社
９）金子（2014）同上
10）大石（2019）同上

※本研究は、2021年５月に日本保育学会でのポスター発表の内容に、新たなデータを加え、加筆、修正、再考察を行った。

One consideration about A Study on Rough draft Coaching

Takeharu SAEKI

Department of Childhood Education,
Faculty of Welfare and Health Science,
Fukuyama Heisei University

【Abstract】

Croquis is a quick and concise depiction of moving objects, mainly people and animals. Since it is possible to create works in a short time, it is thought that it is easy to introduce it to drawing activities for children who have difficulty maintaining concentration, and it is necessary to introduce croquis instruction to develop basic drawing skills. it was thought. As for the method, croquis instruction was given to students in the training course for nursery teachers and educators, and croquis instruction was given to kindergarten teachers and elementary school teachers. As a research method, students were asked to rate the pictures they drew themselves. In addition, they were allowed to freely describe their impressions of the teaching.

The results showed that the students' croquis instruction increased the average score of self-evaluation from the initial standard, and the teacher's croquis instruction did not differ between the initial standard score and the self-evaluation average score. From the free description, it can be thought that Croquis draws pictures in a short period of time intensively.

KEY WORDS : Rough draft, Student of a childminder, the elementary school training course,
Kindergarten, primary school teac